

ディベートを用いた読解学習の効用

一斉授業での読解学習との比較

ここでの一斉授業とは、授業者による発問を柱に進められる読解の学習とします。個人の考えをもとにグループで話し合ったり、全体で思考を深めたりしていく授業です。

今回、中学3年の代表的な文学教材である「故郷」の読解学習にディベートを取り入れた実践を紹介してきました。一般的な一斉授業と比較した場合、どんな点がよくて、何が課題なのかを明らかにしていきます。

ディベートの方が優れている点

- 一斉授業でも学習課題が優れていれば、生徒の学習意欲を高めることはできますが、ディベートの方が高い意欲を持続できることは明白です。
- 一斉授業の学習課題も同様ですが、それ以上に、ディベートでは一つのテーマについて思考し、深く読む経験をすることができます。
- 一斉授業では、ほとんど自分の考えを発表できずに終わってしまう生徒が出てくる場合がありますが、ディベートでは、必ず発言することができます。それも、事前の学習、すなわち読み取りの結果をもとに、自信をもってです。これは、一斉授業では、なかなかむずかしいことです。
- ディベートでは、自分が担当する一つのテーマだけしか学習しないように思えますが、結局は、全文を読まなければなりません。そのためには、そうなるようなテーマ（論題）を設定する必要があります。一斉授業以上に、本文を読む目的意識が高いため、くまなく細部にわたって読むようになります。ディベートの準備の段階で、本文を何度も読み直し、自分なりの読みを深めていくようになります。
- ディベートでは、判定員は聞いているだけですが、一斉授業でも聞いているだけの生徒が出てしまうことがあります。同じ聞くでも、ディベートの判定員は、判定をする必要があるため、聞く意識が高くなります。また、自分が担当したテーマ（論題）での学習を通して全文を読んでいるため、違うテーマ（論題）の判定員になっても、傍観者になることはありません。
- 一斉授業でも主題に関わる学習をしますが、十分な練り上げをして、生徒が納得できるような段階までもっていくのは容易ではありません。ディベートでは、相手を説得する必要があるため、その主題がなぜそれなのかを明確にしておかなければならず、ディベートの準備段階で何度も検討を重ねるようになります。その結果、読み取る力を鍛えることができます。

ディベートを用いた場合のむずかしい点

- 一斉授業での読解では、授業者がコーディネーターを務めているため、随時、修正することができます。ディベートでは、始まってしまえば介入できないため修正ができません。今回の「故郷」では、「故郷は変わったのか」のディベートにおいて、現実的にも歴史的にも変わったとする側と心情的に変わらないとする側とで、討論が平行線をたどり、深まりという点では物足りなさが残ったかもしれません。しかし双方とも論拠はしっかりしており、ディベートとしては見応えがありました。

また、「新しい生活はくるのか」のディベートでは、誰にとっての新しい生活なのかを限定せずに進めたために混乱した面もありました。わたしとルントウにとっての新しい生活なのか、ホンルとシュイションにとっての新しい生活なのか、ヤンおばさんを含めた当時の中国の民衆にとっての新しい生活なのか、様々な考えが出てきます。曖昧にしておくことで、思考に幅が出やすくなり、自由な考えを引き出すことができます。その一方で、ディベートとしては不向きであることは否定できません。